

歴史は未来の羅針盤

温故知新

『近江日野の歴史』第二巻「中世編」は、第一章「鎌倉・室町時代の日野」、第二章「日野の社会と文化」、第三章「戦国時代の日野」、第四章「信長・秀吉時代の日野」からなります。役場・公民館等にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。

今回は、『近江日野の歴史』第二巻「中世編」の第三章「戦国時代の日野」の内容を紹介します。

第一節 戦乱の蒲生氏・小倉氏

蒲生氏中興の祖である貞秀(智閑)の死後、家督を引き継いだ秀紀は、近江守護の六角氏との音羽城籠城戦に破れ、叔父の高郷により暗殺されました。これは甥と叔父の後継者争いとされてきましたが、秀紀暗殺後、早くに家督を譲り、自らは出家した高郷の行動から、違う解釈が指摘されています。

貞秀までの蒲生家は幕府や将軍に直属していました。しかし、今後は六角氏が勢力を増すと時代を先読みした高郷が、六角氏と対立した秀紀を排し、大胆な方法で路線変更を遂げ、子の定秀に蒲生家の繁栄を託したというのが新解釈です。

その後、定秀は多くの合戦で活躍し、六角氏の年寄衆として重用



▲蒲生定秀像(信楽院所蔵)

されました。また、定秀は息子の実隆(賢秀の弟)を養子に出して、小倉家を引き継がせました。これにより蒲生氏は小倉氏を一族に取り込み、伊勢への道である千草(種)越を支配下におさめました。

第二節 浄土真宗の展開と日野牧五ヶ寺

正崇寺(大窪)や本通寺(西明寺)などに残る絵伝は、蓮如の日

野隠棲を伝えるもので、奥之池の歯黒講もそれに関わるものです。江戸後期になると、この講は、古い本尊仏などを回り持ちする「廻り道場」の形態となりますが、その習俗は明らかではありません。

日野牧五ヶ寺は、戦国期の日野の代表的な真宗寺院で、興敬寺(西大路)・正崇寺・本誓寺(日田・松尾)・明性寺(増田)・照光寺(内池)が該当します。石山合戦に際して、本願寺への人的・経済的支援や、東海地方の一向一揆との連絡通信の役割を果たしました。

これらの寺院には、滋賀県指定文化財の興敬寺文書をはじめ、阿弥陀如来画像や六字名号など、蓮如期から実如期・証如期の真宗史料が豊富に残されています。

第三節 市と商人

東近江市今堀の日吉神社に所蔵される古文書には、「日野市」という記載があります。その文書は商

人集団間の勢力闘争に関わるもので、日野は拠点的地方集落として「市」が開かれていたようです。位置など詳細はよく分かりませんが、日野市は、八風越や千草越などの伊勢越の道を経て、伊勢と近江を往来する商人の利権が絡む市場として、十五世紀前半には成立していたと推測されます。

第四節 中世の城館と城下町

音羽・鎌掛・中野の蒲生三城をはじめとする当町の中世城郭は、土塁で方形に区画する館城型が基本で、甲賀・伊賀との類似性がみられます。特に、佐久良城跡はその典型で、石垣の存在などから当時の中央権力の影響が認められます。

日野城下町の町割の成立は、史料上の「日野市」「日野町中」などの記述や他地域との比較から、氏郷治世の十六世紀後半以降と推定されます。そして、近世になっても街道が改変されずにそのまま踏襲されたこと、近代になっても近世のまま西大路・村井・大窪・松尾という集落単位を維持していることなど、日野城下町は都市成立を考える上で重要な特徴があります。